

評判やつきあいという「家産」

——千葉県館山市神余かなまりの稲作から——

玉井 里奈

キーワード：稲作，家産，農地，農，民俗学

目次

はじめに

I 本稿の目的と調査地概要

- 1 問題の所在
- 2 調査地概要
- 3 神余の農業

II 神余における米づくり

1 神余の農地と水の管理

- (1) 農地
- (2) 用水管理

2 農政への対応

3 作業の担い手

- (1) K 家の事例
- (2) O 家の事例

4 作業の受委託や農地貸借

- (1) 外部委託と農業用機械の所有
- (2) 委託先との関係

(3) 作業委託の意図

Ⅲ 家同士の関係と稲作

- 1 米づくりの社会的機能
- 2 共同作業と他者への配慮
- 3 「継承する」ということ
- 4 評判と信用

Ⅳ 「家産」と米づくり

- 1 継承されてきたこと
- 2 米づくりを支える「家産」

おわりに

はじめに

本稿は、稲作を営む農家の事例から、家産について再検討するものである。家産とは、家業経営の基礎財産とされ、屋敷やその敷地、田畑や山林、共有地やものの使用权などがこれにあたるとされてきた。

本稿で取り上げる千葉県館山市神余^{かなまり}地域は、不定形かつ小規模な農地で現在も自給的な稲作が続けられている。担い手たちの行動と語りを分析し、これを踏まえて、「家産」の存在が、現在の神余での米づくりを支えていることを明らかにしていく。

I 本稿の目的と調査地概要

1 問題の所在

本稿が対象とする千葉県館山市神余は、農業で生計を維持することは困難ながらも、稲作や畑作が行われている地域である。現在、神余で稲作を営む人々にとって、稲作とは必ずしも生計を維持するための農業に留まらないものといえる。自給的農家が多いことに加え、稲作で収益を上げることは難しいなかでも水田を維持しつづけていることは、「そこで米を作る」という、

「農」の活動として意識されていると考えられる。

1990年代以降の生業研究では、経済的合理性がないながらも継続される生業の再評価がされ、担い手にとって楽しみや生きがいといった情緒的な価値があると述べられてきた〔松井 1998：145、安室 2008：127〕。

しかし、用水確保が重要な課題である稲作は共同性が高く、担い手個人の動機だけでは成立しない生業である。水田や水利は、家の永続や家同士の結びつき〔小川 1995：533〕、村落のあり方にまで関わる存在として評価されてきた〔福田 1982、玉城 1995（1984）、福田 1996〕。

前川智子は、ある家がムラの祭礼の当番を担うなかで先代の記憶が語られることを取り上げ、儀礼が「先祖に対する記憶をめぐる実感を生み出す装置」としてはたらくこと、そしてその実感が「イエの結集の核」とであると指摘している〔前川 2009：65-66〕。前川は、個々人の姿という観点だけでなく「イエを単位とした変化やイエの事情が現在の祭礼のあり方に影響を与えている」と述べる〔前川 2009：66〕。

また、藤村美穂は、山林地主たちが林業不振のなかで「経済的にみると重荷でしかない山林」〔藤村 2015：66〕を次の世代まで維持しようとしていることを取り上げた。そして、これまで家産である山を維持してきた先祖たちの意思や行動、地域の人々や次世代の存在が、現在の担い手の行動に影響していることを指摘している〔藤村 2015：66〕。

以上の指摘を踏まえ、本稿は担い手個人の語りとともに、家の存在に留意して考察を行う。

本稿はまず、稲作を営むにあたって家同士がどのように関わり合っているかを分析する。そしてこの関わりのなかで培われたことが米づくりを支えており、それは「家産」とみなせることを論じていく。なお本稿の記述は、主に平成 26（2014）年 6 月から平成 30（2018）年 7 月にかけて断続的に行った現地でのフィールドワークで得たデータに基づくものである。

2 調査地概要

神余は千葉県館山市の南端に位置する地域である。四方を低い丘陵に囲ま

れた盆地で、JR 館山駅などがある市街地から集落の中心地までは 9 km ほど離れている。

平成 30（2018）年 4 月 1 日現在の神余の人口総数は 610 人、世帯総数は 281 世帯で、年齢別にみると、15 歳未満が 43 人と少なく、約半数の 296 人が 65 歳以上である。人口総数は減少している一方で、一世帯あたりの人員が少くない世帯が増加している [online：千葉県 2018]。

また平成 27（2015）年の国勢調査によれば、農林業従事者が就業者全体の 22%、建設・製造業従事者が 18%（うち建設業従事者は 15%）、サービス業

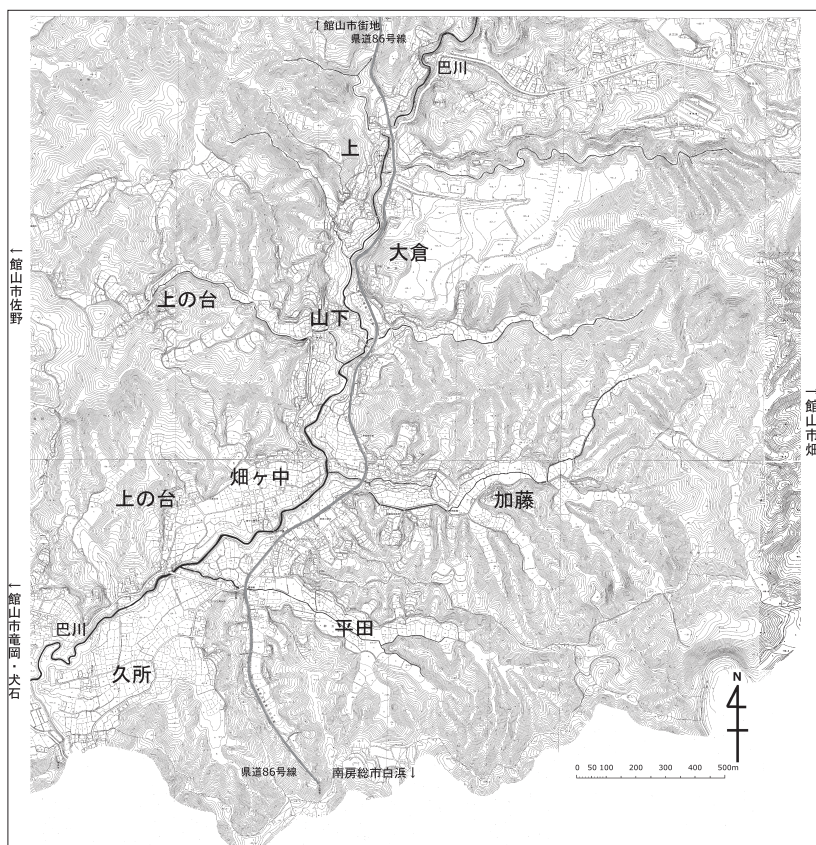


図 1 神余の地形図（「館山市地形図 1/2,500」を筆者が合成・加筆）

従事者が56%を占めている [online：人口統計ラボ 2018]。

神余の自治組織として区長会があり、これは8つの区¹⁾ (図1) から一人ずつ選出された区長で組織されている。

また、神余の農業に関して行政や農協とのパイプ役を果たし、農薬空中散布や獣害対策なども行う農家組合長会は、耕作者が少ない大倉区を除いた7区から一人ずつ選出された役員で構成されている。農業用水の管理は、地域内に複数存在する水利組織ごとに、もしくは組織を作らず耕作者個人で行われている。これら区長会と農家組合長会、および水利組織はそれぞれ独立して存在している。

以上が、本稿が対象とする地域の概要である。当該地域では圃場整備は行われておらず、農地は不定形である。水田は、ヤツと呼ばれる山間と、ハラと呼ばれる平坦部にあり、その面積は広くて1枚10a程度、狭いところでは2～3aほどである。生産性の向上を目指す施策の対象とはならなかった地域であるが、施策に左右されにくかったことで、農地管理の方法には耕作者たちの選択がより大きく反映されていると考えられる。

3 神余の農業

神余は、耕地面積が狭く農業だけで生計を立てることは難しい。そのため、現金収入の手段を別に持ちながら、兼業で稲作や畑作を行ってきた集落である。葉タバコ (筆者注：昭和50年代頃に衰退)、野菜類、センリョウや花卉栽培等を行ってきた [池田編 1969：19-20]。現在でも、大工や左官職といった建築関係者が多い。かつてJA安房神余支店があったが、平成17 (2005) 年にJA安房豊房支店へ統合された。

平成27 (2015) 年時点での神余の販売農家数は38戸で、内訳は専業農家14戸、第1種兼業農家10戸、第2種兼業農家14戸である。このほか自給的農家も多数存在し、45戸にのぼる。また、全体として農家数は減少傾向にあり、特に第2種兼業農家の減少が顕著である [農林統計協会編 2017]。

販売農家よりも自給的農家の数が多いということは、神余の農家の半数以上が、農業収入をほとんど得ていないということを示している。

神余の経営耕地面積は水田が約 17 ha、畑が約 7.4 ha で〔農林統計協会編 2017〕、水田では 10 a あたり 7～8 俵（60 kg／俵）の収量を得ている。販売農家の水田の面積は平均 50 a だが、自給的農家は合計 10 a ほどの水田しか持たない家もある。さらに、農地への通いにくさや、ここ数年で急増したイノシシによる獣害を理由に、人家から遠い山間の農地から耕作放棄が進んでいる。

地主小作制については、聞き取りの限り神余ではあまり強固ではなかったと推測される。なかには農地解放の時に小作地を手に入れた家もあるというが、後述（Ⅱ-3 および Ⅲ-3）する農家が現在も管理する農地は、農地解放とは関わりがないものである。

Ⅱ 神余における米づくり

本章では、神余の農地や用水管理について概観したのち、現在も稲作を営む 2 軒の農家を取り上げる。

1 神余の農地と水の管理

（1）農地

館山市では都市計画法に基づく線引きをしていないが、市内に農業振興地域の農用地区域²⁾が存在している。また、館山市全域が特定農山村地域と半島振興対策実施地域に指定されている³⁾〔農林統計協会編 2017〕。

神余の農地は、全域が農用地区域と定められている。これは、農業振興地域のうち農業用地として利用すべきものと定めた土地の区域を指し、農用地区域内における農地転用は原則として認められない。

地域全体を対象とした農地の圃場整備は行われていないため、不定形な農地で耕作が続けられている。地域の農地のほとんどは、ヤツに開かれた階段状のものである。特にヤツにおいて耕作放棄が顕著であり、ハラでは比較的農地が維持され続けている。

平坦で広い農地がある南西部では、圃場整備が何度か提案がされたものの

実施されることはなかった。圃場整備によって生産効率が上がることで広い農地を持つ家がより有利になるという懸念や、農家組合長など地域の主だった人々の反対に合うなどして実現に至らなかったという。これについて、獣害対策の面では圃場整備をしていたほうが電気柵も設置しやすかっただろう、と話す者もいる。

神余の他の地域では、圃場整備の提案自体がされなかった。一枚当たりの面積を広げるために、隣接する農地を統合する工事はあるものの、これは農地所有者自らが行っている。

また、昭和 31（1956）年度から昭和 37（1962）年 3 月にかけて、館山市の農業基盤整備事業として、神余が属する豊房地区（旧豊房村域）の水田完全暗渠排水工事が行われた〔館山市秘書課編 1962：1 面〕。しかし神余ではこの時工事は実施されず、昭和 40 年代に加藤区の一部と久所区全域の水田で暗渠排水工事をし、乾田化をするに留まった。この工事は住民間の合意をもとに実施されたが、加藤区に水田を所有する耕作者のなかには、費用がかかることを理由に工事をしない者もいた。

また、農業用水は慣行水利権⁴⁾が認められている。神余では、館山市域を管轄する安房中央土地改良区には属さず、行政の事業とも別に圃場や水利設備の管理が行われているのである。

現在この地域では、獣害や担い手の高齢化によって耕作放棄が進んでいる。バインダーなどの農業用機械は軽トラックにのせて農地まで運ぶが、車での機械搬入ができない場所にある農地は、労力がかかることを理由に放棄されているのである。それゆえに、山中やヤツの奥の水田から耕作放棄が進み、現在は人家に近い範囲の水田が維持されている。こうしたなかで、水田から転作して農地利用を続ける耕作者もいる。その場合、山間の日陰という土地を生かし、センリョウ畑として利用している。

（2）用水管理

神余の農業用水には、沢の水や「しぼり水」（湧水）を指す「ジミズ」と、巴川の水を電動ポンプで汲み上げる「キカイミズ」の 2 種類がある。農地の

場所によって用水の取得方法は異なっており、複数の水源を併用する場合もある。巴川は、神余地域の北西にある山中に源を発しており、神余地域は巴川流域で最上流に位置する集落となっている。

畑作の用水は、天水とジミズで賄われている。降雨のほか、畑の脇に小さな溜池を作って雨水を溜めている農家や、沢や水路から水を引き込んで使っている家もある。

水田はジミズのみを用いる地域と、キカイミズとジミズを併用する地域に分かれている。ヤツの田はジミズで必要な水量を賄えるが、ハラの田はジミズだけでは不十分なため、キカイミズも用いている。

自治組織である区は原則として居住地によって所属が決まるが、神余の水利組織は水田がある場所ごとに耕作者を構成員として作られている。そのため、神余のさまざまな場所で耕作する者は、複数の水利組織に入ることになる。しかし、こうした水利組織の共同作業は地形で区切られた範囲、もしくは使用するキカイミズの受益範囲で完結しており、神余の水利組織全体を統括する組織は存在しない。また、水利組織を作らずに個人単位で管理を行っているところもある。

ジミズだけで賄える地域とそうでない地域の最大の差は、用水にかかる費用の有無である。神余では慣行水利権が認められており農業用水を無料で使うことができるため、ジミズのみを使用する農地では、用水に対する費用を負担せずに耕作ができる。

一方、キカイミズを使う地域はポンプの電気代を負担する必要がある。そのため、水の受益範囲を明確に定めて受益農家から費用を徴収することが行われてきた。用水にかかる費用は耕作者から反別割で集金しているが、中山間地域等直接支払制度⁵⁾の交付金を電気代や堰・導水管の改修費にあて、耕作者の負担軽減を図っている組織もある。

農業用水の管理にあたり、水番がいるのは久所区にある水田だけである。受益範囲が広いために個人管理では水が回らなくなることを懸念してのことであるという。

他の場所では水利組織の有無にかかわらず個人管理であり、同じ電動ポン

プや水系を使う者たちが各々時間をずらしながら順番に水を使っている。比較的範囲が狭く、耕作者が少ないため、互いに配慮しながら秩序をもった水管理が可能となっている。順番や清掃の日取りなど、慣習的に行われてきた水の管理方法があるため、それに従った水の利用を行う必要がある。

一般的に、稲作では、水系単位で用水確保のため共同組織化がなされる。しかし神余において、取水方法は農地の立地によって異なっており、場所によっては共同組織化の必要がないケースも発生していることがわかった。それは沢や湧水などのジミズを水源とする地域である。

2 農政への対応

ここで、神余の耕作者たちが農政に対してどのように対応していったかをまとめる。

神余は、館山市が主導する圃場整備や暗渠排水化工事といった農業基盤整備を積極的には実施してこなかった。地形的に、圃場整備による生産性の向上を目指した事業からは等閑視されてきたといえる。耕作者間の合意形成ができた範囲で、暗渠排水化のみ行ったという事例から、神余の人々にとっても圃場整備は「何としてもしなければならないこと」ではなかったと考えられる。

神余の耕作者たちが圃場整備を選択しなかった背景には、①耕作者の間に「この地域では農業で生計を立てられない」という認識があり、多額の費用をかけて圃場整備を行うことをしなかった、②山間に小さな農地が点在するところでは、圃場整備の基準であった1枚 30 aの面積を確保することが困難だった、③農地を多く持つ家とそうでない家の間で、合意形成ができなかった、ということが挙げられる。②と③は、農地の立地による違いだが、①については、所有する農地の場所にかかわらず、神余の耕作者たちにある程度共通して持たれていた認識といえる。

未整備ゆえに起こることとしては、機械作業の困難さやアクセスの悪さ、農地が隣接する家同士の生産暦が規定されることなどがある。また、後述する農作業の受託可否を決める際の基準に、作業のしやすさを置く農家もある

ため、未整備の状態は農作業受委託にも関わってくるといえる。

加えて、農用地区域内農地であるという制約が、神余で農地転用を不可能にしている。これによって受けられる補助金や税制優遇はあるものの、神余の人々は、農地を「農地として」維持しつづければならないという状況にある。

戦後以降、通にくいヤツの奥から耕作がされなくなっているものの、ヤツの水田は取水のための費用負担がないという利点もある。用水に費用がかかる地域では水利組織が作られ、交付金の交付を受けつつ活動がされている。神余では、それぞれの農地の条件に合わせ、作業の共同化や公的な補助の選択がなされているのである。

3 作業の担い手

それでは、神余ではどのように稲作が行われているのか。本節では、他の家との間で農地や農作業を受委託している家について取り上げる。

(1) K 家の事例⁶⁾

K 家は、農作物を親戚や知人に贈っているが出荷はしておらず、換金を主目的としない農作物の生産活動をしている。現在は、加藤区にあたる地域に居住しているが、100 年ほど前は畑ヶ中区に屋敷があった。今も自治組織は畑ヶ中区に属している。

現在の K 家の主な生計維持活動は K. Y. 氏（男性、昭和 43〔1968〕年生まれ）による自営の塗装業と、妻である K. S. 氏（女性、昭和 41〔1966〕年生まれ）の会社勤務である。調査の限りでは、K. Y. 氏の 3 代前から K 家は他に現金収入の手段をもちながら耕作を行っていたといえる。

平成 26（2014）年、平成 27（2015）年当時、K 家が耕作していた田は 5 枚で、耕作面積は合計約 15 a である（図 2）。いずれの水田も現在の K 家の屋敷近くにある。

K 家が耕作する水田の一部は、後述する M₁ 家ともう 1 軒から借りたものである。田の賃借料は 1 軒にのみ支払い、それ以外の家からは無償で借りて

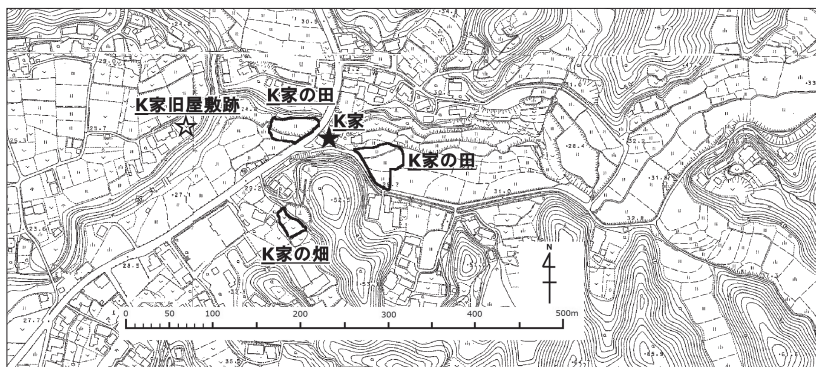


図2 K家の水田と畑（「館山市地形図 1/2,500」を筆者が合成・加筆）

いる。収穫した米は、すべてK家のものとなっている。

また、K家では、田の耕運や畦の整形、代かきを専業農家のO.M.氏（男性、昭和24〔1949〕年生まれ、後述）や、近隣に住むM₁家に手間賃を支払って委託している。O.M.氏への耕運の委託は15年以上前から行っていたが、畦の整形を両家に委託したのは平成26（2014）年以降である。

畦の整形は、K.Y.氏の母であるK.K.氏（昭和22〔1947〕年生まれ）やK.S.氏が手作業で行っていたのを、「大変そうに思ったのか機械でしてくれるようになった」（K.K.氏）ことが委託のきっかけであった。これ以来耕運や代かきとともに手間賃を支払って委託するようになったという。K.K.氏は、鋤で畦を作る作業を「面白い」と思いながら行っていたものの、やはり委託したことで負担が減ったとも話している。近隣の人々からの働きかけをきっかけに、これまで自家で行っていた作業を委託するという仕組みができていったのである。

また、K家では収穫した米を親戚に贈っているが、それをめぐってこのような出来事があった。K家では稲を天日干しで乾燥させているが、干す作業の負担を考慮し、全て機械乾燥に切り替えると決めたことがあった。しかし、「やはり自然乾燥させたおいしい米が食べたい」という親戚の言葉から翌日にはその決定が覆り、天日干しを続けることになったという。

K家の藁の貰い手は、親戚のほか神余に住む農家である。米の贈与は、親

戚や知人への食糧の供給となる。また、藁は堆肥やマルチング材として利用でき、これを必要とする農家にとって、稲作農家の存在は重要なものとなっている。

このように、作物の買い手の存在もまた、収穫・乾燥といった生産方法の選択に影響を及ぼしているのである。

（２）Ｏ家の事例

上の台区に居住する専業農家のＯ家は、神余地域内に、インゲンやシュンギク等を栽培するハウス用の畑約 50 a とセンリョウ畑約 10 a を持つほか、神余の複数の場所に合計 20 a ほどの水田を所有している。

また、神余に隣接する地域にも水田約 60 a を所有しているが、この水田は O. M. 氏の先々代の頃にはすでに O 家の土地であったという。このほかに、神余に約 40 a の水田を借りて耕作している。O 家の農地で収穫した米は、自家用と親戚への譲渡用を除き出荷している。

主な担い手は O. M. 氏である。千葉県いすみ市（旧夷隅町）の出身で、昭和 56 年に妻（昭和 27〔1952〕年生まれ）の実家である神余へ移り、以来農業に従事している。O. M. 氏の実家も稲作を営んでおり、その手伝いをすることもある。O 家は先代も専業農家で、昭和 50（1975）年頃までタバコ栽培をしていたという。O. M. 氏は神余青壮年会役員や区長、館山市インゲン生産組合長を務めた経験がある。住民からは、地域の代表的な専業農家として名前が挙がる人物である。

O. M. 氏は、他の家から借りた農地での耕作や、農作業の受託をしている。作業を受託している水田の面積は、O 家が所有する農地の面積よりも広がっている。本稿では、平成 16（2004）年から平成 28（2016）年の間に受託した作業について分析を行う。

受託する作業は、水路の修理、耕運、代かき、田植え、除草、草刈り、稲刈り、稲こわし（脱穀）、乾燥等と水稻栽培の全工程にわたっている。

O. M. 氏は毎年 20 軒前後の家から作業を受託しており、10 年以上引き受けている家は 12 軒ある。なお、うち 2 軒の水田は、所有者から O. M. 氏が賃借

権を得て管理している。O. M. 氏によれば、10 年以上受託を続けるのが通常で、数年あるいは 1 年しか受託しないということは例外的なケースであるという。

稲刈りだけを委託する家もあり、すべての年において、稲刈りが最も受託の多い作業となっている。また、耕運のみを委託する家、田植えのみを委託する家もある。農事日誌をみると、耕運、田植え、稲刈りの時期は受託作業に費やす日が月の大半を占めている。

委託者は、①神余に居住・農地を持つ者、②神余外に居住し、神余に農地を持つ者、③神余外に居住・農地を持つ者、の 3 つに大別される。③のケースは、O. M. 氏の知人である場合と、親戚や知人を介して依頼してきた場合とがある。

賃借権を得て管理している農地と、作業を受託している農地で収穫した米は乾燥まで O. M. 氏が行い、その後は委託者へと渡している。

O. M. 氏に委託する家の水田耕作面積は、広い家でも 50～60 a 程度（10 年以上受託している家の中では 4 軒ほど）で、こうした家は自家消費分を除き出荷する。これ以外の家は 10 a 程度のため、出荷せずすべて自家消費分にまわしているという。

作業の謝礼は賃金として委託者が支払う。金額は、館山市が公表している農作業標準賃金の目安をもとに、農地の面積に応じて算出されている。O. M. 氏は、委託者との間で事前に賃金の金額を取り決めたくて作業を行っている。また、キカイミズを使う地域の作業を受託する際に、どちらがポンプの電気代を負担するかは受託者と委託者の間で取り決めるが、たいていは実際に耕作を行う受託側が支払うものだという。

O. M. 氏が作業を受託する際の判断基準は、農地の立地条件である。農道に近い、あるいは接している農地を中心に受託しているという。また、委託者の死去や、委託者が農業用機械を購入したこと等をきっかけに引き受けをやめることもある。

4 作業の受委託や農地賃借

K 家の作業内容と、O. M. 氏が受託している作業から、稲作では共同での

管理や作業の外部委託が行われていることが確認できた。特に外部委託されるのは機械が必要な作業である。

(1) 外部委託と農業用機械の所有

農作業の委託によって、労働の省力化や農業用機械購入費用の負担を軽減していることが指摘できる。話者の語りから、高額な機械を購入し維持管理を行うよりは、賃金を支払い外部委託したほうが良いという考えのもと、その選択がされることがわかる。さらに、播種から収穫までこまめな管理を要する畑作と異なり、稲作は機械を使う作業をある程度集約できる点も農作業の受委託を可能にさせているといえる。

稲作の作業が外部委託される場合、作業の引き受け手となるのは農業用機械を所有している家である。ただし、受託する側も無条件に農地管理や作業を引き受けているわけではなく、相手の農地の状況により受託するか否かを判断している。その指標の一つに、農地の農道からの距離、すなわちアクセスしやすい場所にあるか否かということがあり、これは圃場整備がされていないことによる影響である。

作業を委託する側については、負担になる作業を外部委託し省力化することで、耕作を続けることができ、それが耕作放棄の抑止に繋がっている点が指摘できる。一方、作業を受託する側も、それによって賃金を得ることができ、機械を所有することの費用対効果を高めることもできる。委託者・受託者の双方に、何らかの利益をもたらしているのである。

先に述べたK家の農作業委託も、作業に必要な農業用機械を持つ家に依頼されている。また現在では、家で継承してきた水田よりも、他家から借用している水田の面積の方が大きくなっている。無償で借りている農地もあり、収穫された米もK家のものとなっている。農地を借りているという点では小作人だが、何らかの理由で所有者自身が耕作できなくなった農地を引き受けているため、かつての地主小作制とは全く異なる状況である。

なお、農地貸借や作業の受委託をする農家間での米の扱いは、各農家の希望に任せられている。本稿で検討した三農家の事例では、稲刈りの作業を委

託した場合、収穫された米はいずれも作業の依頼主のものとなっている。作業の対価には現金が用いられており、収穫された米を作業の引き受け手に物納する事例はみられなかった。農地貸借が行われる場合は、①小作料を支払い、米も農地所有者に渡す事例、②小作料を支払うが、米は小作人のものとなる事例、③小作料はなく米も小作人のものとなる事例、の3つがみられた。

(2) 委託先との関係

続いて、農作業の受委託や農地貸借が、どのような関係性を背景に行われているかを分析する。

それぞれの家との関係について詳しくみていきたい。K家が畦の整備を依頼するようになったM₁家は、K家と屋敷が近いことに加え、古峯講をともにに行うなど、親しいつきあいがある。

また、O.M.氏が耕作する水田と、K家の水田は隣接しており(図3)、水路の清掃作業は毎年ともに行っている。O.M.氏への耕運作業の委託は15年以上続いており、そこに畦の整備作業も加わったというかたちである。

また、K家は平成25(2013)年に畑ヶ中区のS家との間で、農地を交換している。かつて畑ヶ中区にあったK家の屋敷近くの農地をS家に譲り、現在のK家に近いS家の農地を取得している(図3)。それぞれの屋敷に近い農地を管理したいという理由で行われたが、結果としてK家が手放した農地の

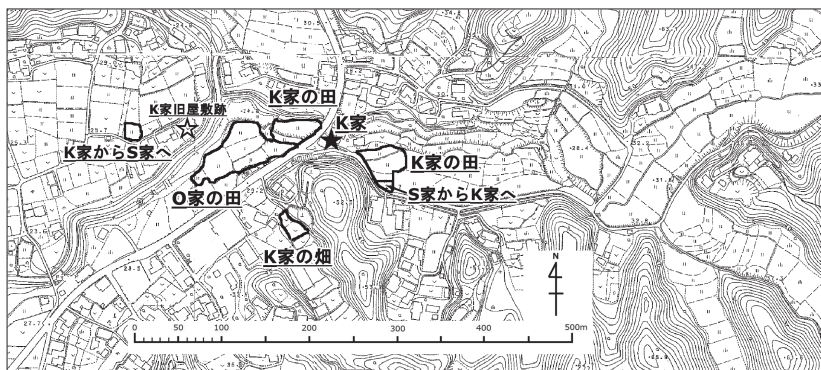


図3 農地の位置関係(「館山市地形図1/2,500」を筆者が合成・加筆)

方が面積は大きい。S家とは同じダイ⁷⁾に属しており、三夜講や庚申講ともに行っていた。

O.M.氏が作業を受託する相手は、知人、神余地域内の家、親戚、知人の親戚などである。すでに彼に委託している人の紹介で作業を依頼してくる家もあるという。なお、農地自体は神余地域内にあっても、所有者は近隣の他地域に居住している場合もある。

これらの事例から、受託者と委託者の関係は、①農地が隣接している家、②親戚等の血縁者間、③受託者の知人、知人の親戚、④同じ自治組織や講に所属するなど、生活上のつきあいがある家、⑤すでにつきあいがある家を通じた紹介、に分類できる。

(3) 作業委託の意図

また、自家消費・出荷に関わらず、畑作（野菜・花卉栽培）の作業が外部委託されることはない。畑作の場合は作業の一部ではなく、農地そのものを貸借する。稲作と異なり、作業時期を集約しにくい点が、外部委託されない理由と考えられる⁸⁾。

稲作作業の外部委託を行う理由は、①農地所有者が高齢になり耕作が難しくなったため、②農業機械を持っていないため、の二つに分けられる。O.M.氏は、トラクターや田植機、コンバインなどさまざまな機械を所有しているため、作業の委託先として選ばれるのである。

このように、作業の受委託には農業機械の所有状況が関係していることがいえる。外部委託はその作業に必要な機械を持つ家に依頼する。自家では機械を持たず、他家に賃金を支払い依頼することで、コストや労働の省力化を図っているといえる。農地貸借については、自家ではこれ以上耕作できないが、農地を荒廃させないために、他家に委託することで農地利用を続けていると考えられる。

こうした作業の受委託や農地の貸借については、ある家が常に作業や農地を任せるだけ／引き受けるだけ、などと一方的というわけではない。K家のように、もとの所有者が耕作をやめた農地を引き受ける一方で、作業の一部

を別の家に依頼する事例も存在する。

また、ある家が農地利用を続けることで、結果として圃場環境が保たれていることも指摘できる。ある話者は、隣接する水田が耕作されなくなったため、これまで以上に自家の水田に水が溜まるようになってしまったと話す。ここは湧水がある場所に作られた湿田であるため、特に周囲の耕作状況に左右されやすい。作業の受委託・農地貸借などを通して耕作が続けられ、農地の荒廃が抑制されることで、それが周囲の農地で耕作を行う者や、近くに住む者にも利益をもたらしているのである。

神余の地域内で農地を貸し借りする際、その旨を館山市の農業委員会に申請する場合と、申請せずに農家間の約束のみで行われる場合がある。申請の有無は耕作者の考え次第で、顔見知りであっても口約束に留めず申請を行う者もいれば、そうでない者もいる。農地貸借の理由としては、高齢になった、手が回らない等の理由により所有者自身が耕作できなくなったことがある。引受先は、農地が隣接している家や、もともとつきあいのある家である。農業委員会を通した斡旋ではなく、面識のある相手に任せるのは、「きちんと農地を管理してくれる人かどうか」という判断材料がある相手だからと考えられる。信頼できる相手に依頼し、それに法的な裏付けを与えるために、農業委員会へ貸借権申請をしているといえる。貸借以前から存在するつきあいが、相手の信頼性を確認するための指標になっているのだと考えられる。

Ⅲ 家同士の関係と稲作

Ⅱ章で取り上げた事例から、神余の農地の特徴のほか、農家間で作業の受委託や農地のやりとりが行われていることが明らかになった。本章では、稲作によって発生する家と家との関係について検討する。

1 米づくりの社会的機能

まず、神余における米づくりを、その社会的機能から述べる。

神余における米づくりの社会的機能とは、第一に、水田耕作が続けられる

ことで、農地や水、周辺の環境などを保全できているという点である。場所によっては、自然に水がしみ出してくる湿田が存在しており、稲作が行われて人の手が入っていることで保水機能が保たれている事例もある。その家の者が食料や収入を得るためだけでなく、稲作が続けられることで集落の環境が維持されているという副次的効果もある。そのため、私有地である水田もまた、地域の共有財に等しい位置づけとなっているといえる。

第二に、米や藁などを他者に提供できるという点である。神余での稲作は、自給を前提にしたもので、自家消費分を引いた余剰米を親戚や知人に譲渡、あるいは農協等に卸している。ここでは特に前者に注目したい。米を作り続けることで食糧を調達することができ、さらに定期的に米を贈ることで、相手とのつながりを保つことになっている。また、作物の栽培に使う材料として、藁を必要とする農家の需要に応じることができているのである。

この二つを踏まえて、第三の点として重要なのは、米を作るという行為が家同士の関係を取り結び、それを継続させていることである。稲作には、強弱の差はあるが常に「共助」が発生しており、神余では米の贈与や水利慣行、農作業の受委託に顕れている。

本稿では、「共助」とは共同作業だけでなく、他の耕作者への配慮や、それゆえになされる行為も含むものとして用いる。稲作によって「共助」が生まれることで家同士の関係が結ばれ、稲作が続けられることでそれが保たれている。そして、家と家の繋がりがあることで、作業の受委託や農地貸借をする際に相手の信頼性を図ることもできる。そこから、また新たな稲作のための「共助」が生まれていくのである。

2 共同作業と他者への配慮

神余の、小規模かつ未整備の農地という環境ゆえの共同化については、農地が隣接する農家同士の作業日程の調整がある。舗装された農道から離れた農地では、農作業用機械の移動が不便になるということが発生している。また、農道に接していないことで他の家の農地を通らなければ行けない立地の場合、水回しや田植え、稲刈りといった作業の時期を農家同士で調整する必

要がある。

また、複数の耕作者が共同で使っている水路であっても、管理のための共同作業は行われていない場所もある。水番を決めて水の分配をしている水利組織は、神余では1ヵ所のみである。それ以外の組織、または水利組織自体が存在しない地域では、水を田に引く際に声をかけあうか、声はかけないが周囲の田の水の入り具合を確認しながら行う、といったことがなされている。

こうした行動は、「水を使いすぎない」という他の耕作者への配慮のもと、利己的な使用を抑制し譲り合うことで成り立っているといえる。農地や水利施設の管理にあたっては、水路清掃や電動ポンプの整備といった共同作業を伴わない地域でも、耕作者たちの意思決定は他者を意識したものとなっている。神余では、農地・用水の利用方法や生産暦の決定において他の耕作者の事情を考慮することが、暗黙のうちに、ごく当たり前になされているのである。

3 「継承する」ということ

他者を慮り行動することについて、次の農家の事例を通して考えてみたい。本節で取り上げるのは、農家に生まれ、定年退職後に本格的に農作業を行うようになった人物である。

上区に住むI.S.氏（男性、昭和26〔1951〕年生まれ）は、農業高校を卒業後、サラリーマンとして働きながら休日に実家の農作業を手伝い、60歳で定年退職後に本格的に農作業を始めた。館山市内出身の妻（昭和34〔1959〕年生まれ）とは平成5（1993）年に結婚、2人の息子がいる。

平成30（2018）年現在、自宅近くに水田4a、畑4a、ソテツ畑50aを所有するほか、館山市内のA地区（図4）に圃場整備された水田30aを所有し⁹⁾、耕作をしている。収穫した米は親戚等に配り、野菜は自家消費をする一方で、ソテツとカナリアナスを換金作物として栽培・出荷している。特にソテツ栽培は品質の良いものを作ることにこだわりを持ち、良さを認められることがI.S.氏の喜びになっている。

I.S.氏の父（大正13〔1924〕年生－平成18〔2006〕年没）は農業専従で、稲作と野菜栽培を行っていた。定年退職後の息子が稼ぎを得られるようにと、



図4 館山市A地区（国土地理院空中写真「CKT20172-C19-4（南房総）」を一部トリミング）

I.S.氏のためにソテツを植えたほか、A地区の水田30aを購入していた。I.S.氏によれば、I.S.氏の父は、山がちな神余の地形を指して「これからは、もうこんなところで米作りを続ける時代ではない」と話し、神余の山の中にあった水田の耕作を昭和50（1975）年ごろにやめたという。一方で、同時期にA地区の水田を購入している。

こうした行動の背景には、神余の水田に代わる米の生産場所を息子に残そうという考

えがあったと推察できる。ソテツの植樹も、新たな水田の購入も、将来子どもが生活に困らないようにという配慮からの行動であったといえる。I.S.氏は、1年単位の目先のことなく、5年、10年先を見据えたものの見方をするよう心がけており、これは父の影響であると話す。

I.S.氏は、神余とA地区の2カ所で稲作を行っているが、この二地域の農地では、稲作の作業内容に違いが認められる。神余に所有する農地での作業はI.S.氏がすべて行うが、A地区の収穫、脱穀、乾燥作業は、コンバインを所有する現地の専業農家に委託している。隣接する水田の所有者から紹介されたことがきっかけで、7～8年前から依頼するようになったという。神余では刈り取りをバインダーで行い、稲を自然乾燥させているが、A地区では機械乾燥である。米を自然乾燥させた後の藁は、すべて畑の肥料として利用している。

また、農業用水に関しても違いがある。A地区では使用料を支払っているが、神余の水田は用水取得に費用はかからない。ただし、水路管理にかかる労



図5 止め場水路の流路と水田（「館山市地形図 1/10,000」に筆者が加筆）

力は、神余のほうが大きくなっている。

I.S.氏が神余の稲作で利用する水路¹⁰⁾（図5）は、明治27（1894）年、畑地を水田に変えるために開削されたものである。I家がここで稲作を始めたのは昭和4（1929）年、I.S.氏の祖父の代からとみられ、それ以降代々水路の管理に携わってきた。昭

和30年代には少なくとも12軒がこの水路を使って耕作をしていたが、平成30（2018）年現在の利用者は2軒である。

毎年3月下旬に、全長800mほどある水路の掃除を2日ばかりで行うほか、堰のとめ板を撤去あるいは設置もしなければならぬために集団で管理を行ってきたが、耕作をやめた者は水路の管理に携わらなくてよいことになっている。管理には各家から一人ずつ参加する決まりであったが、平成27（2015）年に80代の男性が年齢を理由に耕作をやめたことで、管理のための人員が足りなくなった。そのため、これ以降は残った2軒とも夫婦で参加し、計4人で水路の掃除を行うようになった。

I.S.氏は「水路を維持するためにかかる労力をお金に換算して考えていたらとてもやっていられない」、「趣味としてやっている」と話すほか、「水路を守りたくて田んぼをやっている」と話すこともある。この水路を残すということが、稲作を続ける動機の一つになっているという。

神余で生まれ育ったI.S.氏にとって、水田や水路は生活に密着した存在であった。春になると水路に水が流れはじめる光景は季節を感じさせる馴染み深いものであるという。さらに、自ら稲作や水路の管理を行うようになって

からは、大規模な水路を敷設し、畑地を水田に変えた先人に対して、手間のかかるものをよく作ったものだとか驚きや感心、敬意を抱くようになったという。

このような先人たちへの感心や敬意について、経験と実感に注目して考えてみる。I.S.氏は毎年、山中へ水路の清掃や堰の開閉をしに行く。これはとても手間のかかる作業だが、だからこそ、その大変さや継承することの重さを感じることができるのではないか。「止め場の水路」の管理は、水口の開閉や、ポンプのスイッチを入れれば取水ができる場所とは異なっている。山の中の狭い道を堰まで歩き、水路やトンネルの清掃もしなければならない。それを行うということは、この水路がどこに、どのように作られているかを実感する機会を得るということである。I.S.氏自身も、水路の管理はとても大変であると語っている。しかし、「面倒だから、もうやめよう」ではなく、「これだけ大変な労力をかけて作られたものだからこそ、できる限り使いたい」という価値観をI.S.氏が持っていることが、これまで水路の管理を続けていることにつながっている。

ただし、それが可能になっているのはこれ以外の要因もある。水路の管理をともしに行うM₂氏（男性、昭和22〔1947〕年生まれ）や、それぞれの妻が作業に協力してくれているということである。

M₂氏は神余出身だが、他県に単身赴任をしていた。神余と単身赴任先とを行き来しながら農作業を続けるM₂氏の姿に、I.S.氏はとても感心したという。I.S.氏は「大変な作業であるため、彼がいなければとうにやめていた」と話す。水路を維持するための人手がいるから続けられたということだけではなく、M₂氏とともに管理作業にあたるのがI.S.氏の大きなモチベーションになっていたと考えられる。

I.S.氏の場合、農作物で収益を上げるよりも、自分が生産した作物を評価されることや、その農地や水路を使い続けることに重きを置いている。ソテツ栽培などによって収益を得ているものの、「農業」よりも「農」を志向したものといえる。

特に神余での稲作においては、ともに管理を行うM₂氏夫妻や、協力してくれる妻の存在が重要である。さらに、水路の管理を通して生まれた、それ

を作り継承してきた先人たちへの共感や敬意がある。

そして、現在 I.S. 氏が行う稲作やソテツ栽培の基礎にあるのは、彼の父親が後のことを見越して準備していたものである。先代から受け継いだ農地や水路を管理していることが、当人の意欲や作業内容に影響しているのである。自らの利益になることだけをするのではなく、継承されてきたものをどのように残し続けられるかということを、I.S. 氏は常に意識しているのである。

4 評判と信用

ここで、神余の耕作者が、耕作放棄した人をどのように評価しているのかについて触れたい。担い手が高齢になり後継者もおらず耕作放棄せざるを得ない人、イノシシの被害に遭い稲作ができなくなったため耕作放棄した人に対しては、「仕方ない」、「イノシシに入られてしまってはどうにもならない」という声が聞かれた。イノシシに荒らされた水田を畑に転作して耕作を続けている人を「畑に変えて頑張っている」と評する声もあった。また、稲作をやめた者は水路の管理に参加しなくてよいとされており、やめようとする耕作者を強く引き留めるようなことはしていないという。

しかし、彼らは同時に、耕作放棄が進行すれば地域全体の環境維持に悪影響が及ぶことを懸念している。放棄した農地に草を生やしたまま一切手入れをしない人、特に周囲の農地はまだ使われているような場所で手入れを怠る人への評価は厳しい。農地や道の草刈りや掃除をきちんとする家かを住民たちは気にかけており、それがその家の評価にも関わってくるという。耕作放棄に対しては「仕方ない」と理解を示しつつも、周囲へ迷惑をかけないように手入れは続けてほしいと考えているといえる。

ヤツの奥や山中の農地の多くは耕作放棄されているが、人家に近い場所では耕作が継続されている。その理由として、アクセスがしやすいことに加えて、常に人の目に触れる場所であり、周囲に家があることで荒廃の影響が見えやすいからといったこともあるのではないだろうか。

後継者についても、「農地が負担になってしまう」「無理に（米作りを）継いでもらおうとは思わない」「（農地を継承していても、耕作を）やる人もい

ればやらない人もいる。結局は個人の価値観しだい」など、半ば諦観しつつ次の世代の自由にさせたいと考えていることが分かる。

現在も神余で耕作を続ける人々からは、耕作面積の縮小や栽培する作物の変更をしながら、通うことのできる範囲の農地で稲作や畑作を続けようとしている姿勢がうかがえる。耕作放棄に対しても、やむを得ない事情がある場合は厳しい態度はとらないが、農地の手入れを続けることは望んでいるのである。

米づくりを続けることを、神余の人々はどのように考えているのであろうか。

神余の耕作者たちに聞き取りをするなかでしばしば耳にしたのが、「米を作っても儲からない」「作るより買う方が安い」という言葉であった。労力を要しながらも大きな利益を得られない稲作を続けることを「趣味」や「道楽」と表現する話者もいた。同時に、人々が口にするのが、「先祖代々の土地を荒らしたくない」という言葉である。現在稲作を続ける人々は、少なくとも自分の代は米を作り続けようと考えていることがうかがえる。

IV 「家産」と米づくり

神余では農地の転用ができないため、農地を農地として所有する必要がある。しかし現在、収益の面から見れば、稼ぎを得るために「家業として」稲作を営む必要性は低くなっている。こうした状況のなか神余の米づくりを支えるものについて、本章では「継承」に注目して述べていく。

1 継承されてきたこと

現在の神余で稲作を営む人々の語りからは、稲作によって食糧を自身で賄えることや、作業をすること自体への楽しみが生まれていることがうかがえる。同時に、その家で継承されてきたことが、米づくりに影響している点も見落としてはならない。

農地、特に本研究が主とする水田を継承するということは、生産空間のみ

ならず、稲作に関わる権利や諸関係をも継承することを意味する。

神余の耕作者のなかには、農地を手放すこと、それ以前に耕作放棄によって農地を荒らしてしまうことへの抵抗感を示す者がいる。自分の代でやめてしまうことや、農地を荒廃させてしまうことを申し訳ないと思う気持ちである。それは、これまで農地を維持し続けてきた人々に対してのものであろう。I.S.氏の事例からは、水路の管理や農作業を行うなかで先人たちへの共感が生じ、それが米づくりを続けようという動機に繋がっている様子がみられた。

すなわち、農地が「これまで継承されてきた」という事実も耕作者たちの動機に影響しているといえる。継承されてきた農地を、できる範囲で利用しつつ生活したいという意識が、米づくりを続けるという選択や、作業の受委託、農地貸借にあらわれている。このような意識が、神余での米づくりを支える役割を果たしているのである。

水利による共同性の発生と作業時期の集約によって、稲作では耕作者たちがほぼ同時期に同じ作業をすることとなる。そのために、耕作者が協力や配慮をして農作業にあたる必要がでてくる。神余においては、農作業の日程を調整することや、他の水田の様子を見ながら水を引くといったことがこれにあたる。では、このような他の耕作者を慮ることや、暗黙のうちになされる行動は、何によって可能になっているのか。

事例を通してみると、神余の住民は、「農」を営むことのできる環境がある程度整ったなかで生活しているといえる。作業の受委託は、親戚・知人間のほか、日頃つきあいのある近隣住民など、地域で暮らすなかで培ってきたつきあいが基盤となっている。また、農地や栽培技術、水路等の設備管理にかかわる慣行は、先代から継承されてきたものである。

つまり相続によって農地を継承するということは、耕作者は農地というモノだけでなく、関係する水利組織、水利権、農作物の授受の相手、周囲の農地の耕作者との関係、そして時には先代までの評価をも継承していることになる。一方で、農地貸借や所有者移転等により以前の耕作者と全く関わりのない人が耕作する場合は、水利にかかわる慣行は従来のものに従うことになり、稲作をめぐる人間関係は新たに築く必要がある。

内山節は、家業を持続させ子々孫々へとつないでいく基盤として「信用」が重視されたと指摘している。人々は、信用がなければ見捨てられ、あれば安定的に家業を維持することができると考え、信用を失うあるいは禍根を残すような振る舞いを避けたと述べる〔内山 2010：96-98〕。

耕作者がその地域で暮らしている場合、「農」以外でも周辺住民と関わる機会をもつことになる。昔から暮らしている場所ならば、先代・先々代から培われてきた関係性や行動も、現在の評価に関わってくる。この、他者からの評価や評判が、「農」や農地管理にあたる耕作者の判断や行動に影響していると考えられる。特にそれは、利己的な振る舞いをしないという点においてあらわれるであろう。

本稿で取り上げてきた事例から、耕作者たちが作業の受委託・農地貸借を行う背景には、継承されてきた農地や水路をできる範囲で利用したいという意識が存在していることが指摘できる。農地の所有者にとっては、担い手が誰であれ、稲作が続けられることで農地を良い状態で維持することができる。それによって、収穫された米、すなわち食糧を得ることもできている。

そして、モノである農地だけでなく、権利や関係性、それまでの行動への評価といったコトも継承しているということが、耕作者たちが暗黙のうちにいう配慮や行動の背景にあると考えられる。神余で今なお米を作り続ける人々には、収益を上げて稼ぎを得る以外の動機があることが、彼らの語りからうかがえる。農地や米づくりを継承しているということが強く意識されているのである。

2 米づくりを支える「家産」

家産とは、家で継承される財産であり、家業経営の基礎とされてきた。稲作にかかわる家産といえば、農地や農具がまず挙げられる。しかし、今なお米づくりを続ける人々には、家の財産として農地を継承することだけでなく、そこで稲作を続けてきた人たちの存在が意識されている。前川は、儀礼が先祖に対する実感を生み出す装置としてはたらくことを論じたが〔前川 2009〕、稲作に関しても同様の作用がみられる。

本稿で検討してきた事例から、家産を継承するとは、農地などのモノを受

け継ぐというだけに留まらないことであるといえる。筆者は、権利や、他者とのつきあいといった関係性、家の人々に対する評価などもまた、農地と同様に「家産」といえると考えている。

かつての民俗学では、家業や家産が家の重要な要素として論じられてきた。神余における稲作は、家ごとに受け継がれてきた家業ではあるが、現在、家の存立を左右するほどのものとはいえない。しかし、現在も稲作を営むにあたっては、その家の農地のみならず、水利権、水利組織や共同作業への参加、用水利用の順番など、家単位で与えられ、あるいは義務づけられてきたことがら関わっている。

その家の人々が、慣行に従った用水の使用や、他家への行動を通して重ねてきた信用が、その家に対する評価につながり、現在の人々が米づくりを続けられる環境を作っているのである。神余の稲作は、周囲の家を気かけながら、いまなお慣行に従って行われている。米づくりを続けて農地や用水を管理していること、すなわち地域の環境を保つ役割を果たしていることも、その家の評価になるのである。そして、家同士のつきあいが、農地貸借や作業委託のきっかけにもなっている。

このような、それぞれの家で受け継がれてきた「家産」の存在が、米づくりを続けるという選択につながり、またその継続を可能にさせているのである。

おわりに

本稿では、館山市神余の農家がいかにして稲作を営んでいるかを分析し、本稿で「家産」と呼んだ存在が、現在の神余での米づくりを支えていることを明らかにした。

農地というモノだけでなく、その家で継承されてきた権利や関係性、それまでの行動への評価などが、米づくりの継続に影響している。さらに、用水管理や農地の貸借、作業の委託といった、稲作の中で行われる農家間のやりとりは、以上のような「家産」をもとに成り立っているのである。

今後の課題としては、作業委託を行う農家がどのような意図で委託をしているかについて、より実証的な研究を進めていきたい。

謝辞

本研究にあたっては、神余の皆様にご多大なるご協力を賜りました。この場を借りて深く感謝いたします。また、この度の台風や豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復旧と皆様のご健康を願っております。

注

- 1) 上、大倉、山下、加藤、畑ヶ中、平田、上の台、久所の8区。
- 2) 館山市においては、用途地域を指定した区域とゴルフ場以外のほぼ全てが農業振興地域に指定されている〔館山市建設環境部都市計画課 2008：5〕。
- 3) 平成5（1993）年制定の「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律」に基づき、神余を含む旧豊房村全域が特定農山村地域に指定されている。また、昭和60（1985）年制定の「半島振興法」に基づき、館山市全域が半島振興対策実施地域に指定されている〔online：館山市 2016〕。
- 4) 明治29（1896）年の旧河川法制定以前、あるいは昭和39（1964）年の河川法による河川指定以前から、長期にわたり継続・反復されている水利利用を、社会的承認のもとに権利として認めたもの。河川管理者の許可を受けなければならない「許可水利権」と区別される。
- 5) 農林水産省が平成12（2000）年度から実施している交付金制度で、集落協定を通じて農業者間の協力体制を作り、地域全体での生産活動を促すことを目的としている。小規模農地をもつ集落や、担い手が高齢化している集落での農業生産活動を維持するための交付金制度であるといえる。神余には、「集落協定」を結び交付金を受けている団体が複数ある。平成29（2017）年度現在、集落協定を継続している4団体中3団体が、既存の水利組織の構成員で集落協定を結んでおり、そのいずれも電動揚水ポンプで水を分配している水利組織である。
- 6) K家の事例の詳細については、〔玉井 2018〕を参照。
- 7) 5～6軒単位で隣同士などが近い者同士で組む、冠婚葬祭時の互助組織。
- 8) 時期を集約できる田植えや稲刈りの作業は委託しても、稲の生長に合わせて必要な水管理や施肥は委託者自身が行っている。
- 9) A地区は昭和50（1975）年前後の時期に圃場整備がされており、長方形で1枚あたり30aの面積となっている。

10) I.S.氏は「止め場水路」などと呼んでいる。

参考文献

池田和弘編

1969『神余百年史』千葉県館山市立神余小学校・館山市立神余中学校PTA

内山節

2010『共同体の基礎理論—自然と人間の基層から』農山漁村文化協会

小川直之

1995『摘田稲作の民俗学的研究』岩田書院

館山市秘書課編

1962年2月14日「豊房の暗渠排水工事 今年三月で全地区が完成」『館山市広報』119号1面 館山市秘書課

玉井里奈

2018「千葉県館山市神余における『農』の成り立ち—農業日誌の分析をもとに—」『常民文化』編集委員会編『常民文化』41号 成城大学常民文化研究会

玉城哲

1995(1984)「水田稲作と『むら社会』」坪井洋文(著者代表)『日本民俗文化大系(普及版)』第8巻 村と村人—共同体の生活と儀礼— 小学館

農林統計協会編

2017「農林水産省2015年農林業センサス 農業集落カード 千葉県館山市神余」農林統計協会

福田アジオ

1982「村落の統合と水利—静岡県小笠町棚草—」『日本村落の民俗的構造』弘文堂

1996「錯圃制耕地の形成と近世村落」『国立歴史民俗博物館研究報告』66集 国立歴史民俗博物館

藤村美穂

2015「“農的自然”に流れる時間」環境社会学会編集委員会編『環境社会学研究』21号 環境社会学会

前川智子

2009「宵まちと先祖の記憶—茨城県土浦市沖宿町鹿島例大祭における当屋を中心に—」信濃史学会編『信濃』61巻9号 信濃史学会

松井健

1998『文化学への脱—構築—琉球弧からの視座』榕樹書林

安室知

2008「『遊び仕事』としての農—前栽畑と市民農園の類似性—」『農業および園芸』83巻1号 養

賢堂

参照ウェブサイト

人口統計ラボ

「平成 27 年度国勢調査結果 千葉県館山市神余」<https://toukei-labo.com/2015/sangyo.php?tdfk=12&city=12205&id=57> [閲覧 2018.9.20]

館山市

「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する計画」<http://www.city.tateyama.chiba.jp/files/300240805.pdf> [閲覧 2016.4.9]

館山市建設環境部都市計画課

2008「館山市全体及び各地区の都市計画の現状」<http://www.city.tateyama.chiba.jp/files/300003042.pdf> [閲覧 2017.10.8]

千葉県

「千葉県年齢別・町丁字別人口昭和 60 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（昭和 60 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 2 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 2 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 7 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 7 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 12 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 12 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 17 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 17 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 22 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 22 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 27 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 27 年度）」

「千葉県年齢別・町丁字別人口平成 30 年度 第 3 表町丁字別世帯数及び男女別、年齢（3 区分）別人口（平成 30 年度）」

<https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/nenreibetsu/index.html> [閲覧 2018.12.11]

図版出典

国土地理院

「地図・空中写真閲覧サービス」

国土地理院空中写真「CKT20172-C19-4（南房総）」2017年8月9日、国土地理院撮影

<https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1738403&isDetail=true> [閲覧
2018.12.10]

館山市

「館山市地形図 1/2,500」No. 49、No. 50、No. 55、No. 56

2012年撮影、2014年現地調査および測図、2015年3月作成、館山市発行

「館山市地形図 1/10,000」図5、図6

2015年3月作成 1/2,500図を縮小編纂、館山市発行

Relationships and reputation as family property in rice farmers:
Kanamari, Tateyama City, Chiba Prefecture

TAMAI Rina

〈Abstract〉

This paper reexamines family property with a focus on rice farmers. Family property is regarded as the basic property of family business management and includes the homestead, rice and vegetable fields, woods, and common land use rights.

In Kanamari, Tateyama City, Chiba Prefecture, farmers produce self-sufficient rice and use dry-field farming. They continue to grow rice but say, “We make little profit from rice cultivation.” This research found that the rice farmers in Kanamari outsource part of their farm work to other farmers or rent land they no longer cultivate to other farmers. This practice allows the landowning farmers to maintain their farmland in better condition while reducing costs and saving labor, and the borrowing farmers to earn income.

The question becomes why these farmers continue rice cultivation as landowners. Their purpose is not simply securing food. What is most important to them is retaining their farmland and the customary water rights inherited from their ancestors, relationships with neighboring families, and reputation and trust from others in the community. Some of the farmers say they would feel remorse for their ancestors if they did not continue rice cultivation as done by previous generations or if they neglected their inherited farmland. Although these farmers demonstrate understanding toward others who cease farming because of advanced age

or excessive damage from wild boar incursions, at the same time, they are critical of those who neglect their farmland.

Character assessment and reputation in the community influence the farmers' judgment and behavior, especially by preventing them from acting with their own concerns in mind rather than community interests. Inheriting *Ie* does not simply mean inheriting material family property. Like farmland, rights, relationships, and reputation is regarded as family property that has been passed from generation to generation. This family property perspective has caused and allowed farmers to choose to continue rice cultivation.